

## 10年目の3.11

東日本大震災からちょうど10年が経とうとしています。

10年前の震災の日、確定申告の忙しさがピークに達しようかという時期で、東北地方でかなり大規模な地震が起きたというニュースは聞いていましたが、数十人が亡くなったらしいという速報だけで、被害の実態を想像する由もありませんでした。

その後、被害の規模がただならないことを伝えるニュースが次々にネットなどで届き、帰宅して最初に目にしたテレビ画面を今も鮮明に覚えています。自衛隊のヘリから気仙沼の火災の様子を中継していたのですが、画面は暗闇のなか炎に包まれる街を映し出すだけで、被害の状況もよくわかりません。アナウンサーも解説者も「これは・・・」と言ったまま絶句していました。

つい先だって福島県沖で起こったかなり大きな地震が、10年前の大地震の余震だというのですから、自然災害の「時間的規模」の大きさにも改めて思い知らされました。私たちは、この大きな規模の自然災害につねに接して生きているのだと実感します。

### ■ 『方丈記』を読む

3.11直後に岩波文庫版現代訳で『方丈記』を読んでから、久しぶりに方丈記を再読しました。新訳が秀逸なことで評判の光文社古典新訳文庫版です。「ゆく川のながれは絶えずして」という冒頭の美文から想像される、悟りきったような印象の先入観は、10年前に読んだときに、すっかり払拭されました。鴨長明のもっと正直で切実な思いが伝わったように思います。今回改めて読んだ、光文社古典新訳文庫版では、さらに「迷う人によって書かれた、迷いの書物」の色合いが濃くなっているように感じました。

方丈記では前半のほとんどの部分を、鴨長明が若い頃に体験した平安末期の災厄である、大火、竜巻、遷都、飢饉、大地震の記録にあてています。そこでは、都市生活の脆弱さや、人の記憶の風化現象なども指摘しており、今日の我々にそのまま警鐘として響きます。後半部分では、全てを捨てて方丈の住まいに暮らす長明が、人生の憂鬱から解放されたかのように、生き生きと過ごす様子が描かれます。そこでは不運を悟った上で「執着」を捨て、満足して生きていけることの発見が語られています。

ところが、巻末近くになって長明は突然立ちすくみ考えます。「執着を捨てる」ことを得意げに語る、このことこそが「執着」なのではないかと。そしてその自問に答える術を知らないまま「方丈記」は唐突に終わります。

読者は突き放されたように巻を閉じることになりませんが、どこか長明に身近さを感じます。それは長明が自家撞着に陥ったことを率直に述べたからではなく、3.11のあとの私たちの被災者に対する「負い目」のようなものと重なるからではないかと思えます。

## ■ 負い目のようなもの

大震災のような体験を突きつけられると、日常のどうでもよい悩みが背景に退いて、大事なものが見えてきます。被災者でないわれわれにとっても、日常生活の些事の向こう側に思いを致す機会が与えられます。

しかし、そこに啓示される、例えば「無常観」などに、どっぷりつかって生きていくなどどうていできないことは、当の被災者でなければ分かりません。3.11以後、そこで暮らす人々は「無常」についてそれぞれの感慨を抱きつつ、自らを鼓舞して生きなければならなかったでしょう。震災によって得た教訓を心に刻みながら、生きることにそのものに集中していたに違いありません。

震災で大きな被害を受けた気仙沼市階上中学校の震災直後の卒業式で、卒業生が答辞を読む様子が何度かテレビで放送されていましたが、わたしはその姿が今でも忘れられません。15歳の少年は「震災は天が与えた試練というには惨すぎるものでした」と声を詰まらせたあと、続けてこう述べました。

「しかし苦境にあっても天を恨まず、運命に耐え助け合って生きていくことが、これからの私達の使命です」

惨すぎる試練を与える天を前に、少年はみずからのどうしようもない限界を自覚したのだと思います。それを「無常」の自覚と言い換えても構わないのですが、決して抜け出すことのできない、その自覚に沈潜してしまうのではなく、少年は「苦境にあっても天を恨まず」と一歩を踏み出すのです。

私はこの姿に深く感動するとともに、無常を自覚し執着を捨てるという、思弁に過ぎないものに浸りきって安心している自分を恥じ入りました。鴨長明が立ちすくむように筆を置いたのは、現に執着せずに前向きに生きている人、とりわけ、これから生きて未来を築いていく若い人に対して、恥じる気持ちがあったのではないかと、とも思います。

## ■ 若い人たちのためにできること

地震の発生時刻が14時46分だったことで、子どもたちは親から離れて学校などに居ました。74人の児童が亡くなった石巻市立大川小学校の悲劇がありましたが、子どもたちの多くは、避難などして助かり、仕事をしていた親たちが犠牲になるケースが多かったようです。これは、震災孤児を多く生んでしまうという結果につながりました。

当時5歳だった子どもたちは今年15歳になったばかりです。震災孤児の教育資金援助など、私たちにできることはまだたくさん残っています。

(所長 瀬戸 英晴)